

# い っ ず も ど っ ず も

「ドアが開きまーす」「ドアが閉まりまーす」

15年前。当時3歳の息子は、バスや電車が大好きだった。特に、このドアの開閉の際のフレーズを気に入り、家ではお風呂のドアをそれらに見立てて、毎日のごっこ遊びを楽しんでいた。あまりにも長時間続けるので、「もー!ドア壊れるやろー!」と何度叫んだことか。

私の実家に遊びに行くと、それが行われるのはお風呂だけではなかった。実家はマンション。そう、エレベーターという願ってもないものがあったのだ。息子は嬉しすぎて舞い上がっていた。乗る度にささっとボタンの前に立ち、背筋をピンと伸ばして例のフレーズを丁寧に言う。車掌というより、もはやエレベーターガールである。

息子が毎日飽きもせずにごっこ遊びを楽しんでいたそんな時、父が突然病に倒れ、天国へと旅立ってしまった。あまりにも急な別れで、夢のように感じては、横たわった父の姿に現実を思い知らされ… 笑っていても次の瞬間涙が出る… 家族皆がそんな状態だった。父が亡くなったのは元旦、しかも大安だった。おかげでそれ以来、私は大安に安心することも、仏滅に恐れることもなくなった。お正月ということもあり、親戚も大勢集まってくれてにぎやかだったが、それでも葬儀場の待合室では気が重く、皆静かに過ごしていた。そんな中、あのフレーズが聞こえてきたのである。

「ドアが開きまーす」「ドアが閉まりまーす」

「ん?」と声のする方を見ると、なんと父の眠っている棺の小窓をパタンパタンと開閉しながら、息子がいつものごっこ遊びを楽しんでいるではないか。「まじか!?!」私は思わず爆笑した。家族も親戚も、あれほど悲しみに打ちひしがれていた母でさえも大笑いした。人生で一番悲しい時にも笑わせてくれるとは、子どもってすごい!

棺の中の父も、大好きな孫の愛顔にきっと笑顔になったことだろう。その父の姿を想像するとまた笑える。最後の最後に、またひとつ、父との楽しい思い出を増やしてくれた息子に感謝である。